

明治学院大学を去るにあたって

澁谷 浩

種々の理由により、私は今学年限りで明学を去り聖学院大学（埼玉県上尾市）に来学年から勤務することになった。明治学院には29年、非常勤で勤めた年を勘定に入れると30年勤務したことになる。まあ短いとは言えぬ年月であろう。その年月の間、私は自分の勤めている学校がキリスト教主義の学校であり、しかもそのキリスト教は日本キリスト教団のキリスト教であることを常に意識していた。意識せざるを得なかったのは、私が無教会の信者であり、その上、内村鑑三 — 現今の無教会は内村抜き無教会と言われる — の研究者だからである。私が我孫子の自宅で無教会集会を始めて20年を越えた。ところが、そこに集う人々は（決して多数とは言えないが）私と家内を除けば、程度の差こそあれ、皆教会生活の経験者ばかりである。その中でも最も長い、かつ深い教会生活の経験者によれば、そういう自分が無教会集会のなかにいるということは、「たとえばパスポートなしで長期滞在している外国人みたいなもので」、「正

式にパスポートを取るか国外退去するか」どちらかを選ばねばならない時が来るかも知れない、— こんな感想を懐くことがあるそうだ。私がキリスト教主義学校にいて時に懐くのは、まったくこの方の感想の裏返しであった。いや、今春赴任する学校もキリスト教主義なのだから過去形で語るのはいさげないというべきか。ただキリスト教の教派の区別を問題にしないことを以て特色とする学校であると聞く。あまり性急に、同じだろうとか違うだろうとか論じてはなるまい。

例のCコード廃止問題で、私は廃止反対（正確に言えば廃止延期）の立場に立つ人々に加わって署名した。その後しばらく経って、教員ラウンジの戸口で森井学長先生とパツタリ出くわした。先生は大きく眼を見開いて驚きの念を示すとともに苦笑を少々顔に浮かべて、私を見つめた。眼は口ほどに物を言い、である。私は何やら訳のわからないことをつぶやいて、逃げ出した。先生は無教会の私が廃止賛成の立場に立つのを予想されていたのであろう。

68年から70年代の初めまで続いた大学紛争も忘れ得ざる憶い出である。しかし紛争の渦に巻き込まれている時に感じたことは、この種の出来事は歴史に残るような性質のものではあるまい、という予想であった。騒いでいるのはキャンパスの中だけで、一步学校の門から出ると、そこでは平和な生活がある時は静かに、ある時は賑やかに送られていたからだ。日本の

歴史に戦後民主主義の曲がり角として、遥かに大きな意味を持ったのは60年安保闘争の挫折である。しかし当時私は大学院の一年生であった。— こんな憶い出を語っていたら、たちまち紙幅は尽きてしまう。問題のヨリ厳密な把握については、次号の『研究所紀要』の拙稿をごらん下さい。

（しづや ひろし

所員、法学部教授）